

# 稚子ヶ淵

小川未明

青空文庫



もう春もいつしか過ぎて夏の初めとなつて、木々の青葉がそよそよと吹く風に揺れて、何とこのう恍惚うっとりとする日である。人里を離れて独りで柴を刈っていると、二郎は体中汗ばんで来た。少し休もうと思つて、林から脱け出て四辺あたりを見廻すとすぐ目の下に大きな池がある。二郎は何の気なしにその池の畔ほとりへ出た。

すると青々とした水の面おもてがきらきらする日の光りに照うつつて一本の大きな合歡ねむの木が池の上に垂れかかっていた。

「この池の名は何というだろう？」

二郎はその合歡の木蔭に来て鎌や、鉈なたを投ほうり出して、芝生の上に横になつて何を考うるともなく熟じっと池の上を見下している。爽

やかな風がそよそよと池を渡つて合歡の木の葉が揺れると寂然ひっそりとしてゐる池の彼岸あなたで鶺鴒せきれいが鳴いてゐる。うす緑色の木の葉も見えれば、真まっさお蒼ときわぎな常盤木の色も見えてゐる……しかし人影は見えなくて静かな初夏の真昼である。

二郎は種いろいろ々な空想を浮べていた……合歡の木の下に繁しげつてゐる蔦つた葛かずらの裡なかで、虫が鳴いてゐる。二郎は虫の音に暫時間しばしききとれて

いたが、思わず立上つて蔦葛の裡をそつと覗き込んで見たが、姿は見えなかつた。またもとの芝生の上に横よこたわつて池の方を見てゐると又虫の音が聞こえてくる……若もし捕まえたら、彼の竹籠あの中へ入れて、籠の中へ草を入れて、霧を吹いて、庭の南天の枝に掛けて置こう。そうするときつとこのように好い声を出して泣くだ

ろう……。されど身動きもせずに、熟と眸ひとみを青葉の上に落して、滅入るような日の光りを見つめていた。

すると池の上で先刻さきがたの鶺鴒なが一声啼いて向うの岸に飛んで行くのである。二郎は、その鶺鴒の下りた林の方に目を移して又考え込んでしまう。

「ああ、姉さんは死んでしまったのか。」  
と、この時遽にわかに独ひとりごと言ことのように溜息を吐ついて目から涙が溢こぼれ  
る。しかし誰たれも見ているのでないから、落つるままにしておく  
と、涙が頬を伝うてぼたぼたと膝の上に落ちた。

この時、何を思い立ったか、二郎は仰いで合歡の木を見上げたのである。

「大きな合歡の木だな、幾百年経つたろう……早く花が咲けば好いが、花が咲く時分になると村のお祭が何時いつでもあるんだ……しかし姉さんがいないから、寂しくてならん……盆になると姉さんは踊つたつけ……姉さんを村の者は美しいと言う。その噂を聞くと姉さんはいつも赤い顔をしたつけ……。ああ、つまらんつまらん姉さんは死んでしまったんだ。」

思い出すともなく、いつしか姉のことを思い出して二郎は泣いたり、又何か思うて笑つたりしているのである。

白いすき透るような雲が、ふわふわと高く飛んで池の上を渡ると影が水の上に映つて、赫々かっかくと照つていた日の光りが少し蔭ると、天地が仄ほんのりと暗くなつて、何処いずくともなく冷たい、香ばしい風かん

が吹いて来る。何だか寂しいような、うら悲しいような気持になつた。すると又不思議なことには、それはそれは……今迄聞いたことのない、美<sup>びみ</sup>妙<sup>よう</sup>の音楽の音が響いて来て、初めは何でも遠くの方に聞こえたと思うと漸<sup>だんだん</sup>々<sup>ち</sup>近かく、しまいには何でも池の中から湧き出て来るように思われた。

而<sup>そ</sup>して時々は姉の声も交つて、歌うている歌の聲が聞こえて来るかと思うと、つい眠くなつて二郎は其<sup>そこ</sup>処の芝生に倒れたまま、好い気持でうとうとと眠つてしまった。

さだめし二郎は面白い夢を見ていたのであろう。冷たい風が顔を<sup>な</sup>嘗めるように身に浸みて、ふと目を醒まして見ると驚いた。

星の光りがちらちらと見え、全く日は暮れていたのである。池

の面は黒ずんで、合歡に渡る風が一きわ高く、静かな山中やまなかの夜は物凄い程に寂然ひっそりとしている。……耳を澄ますと虫の音が聞こえて来る。叢くさむらの中でかさかさとするのは何かの小鳥が巢たずを探ねているのであろう。手で地上を探って鎌や、鉈を腰に挟んで、一步池の畔に出た時に心覚えのあるだらだら坂を登って、やつと昼前に柴を刈っていた場所まで来て見たが、それから先さきは一向いっこ覚えがない。たとえ覚えはあつたにしても、夜のことでも、とても小道を探し出すことは出来なかつた。

帰ろうと思つても、帰ることが出来ず、家では親達が心配しているだろうと思うと一刻も茫然ぼんやりしてはいられず、だんだん心細くなつて来て泣き出した。……ややしばらくして泣き止んで切り



捨ててあつた、青々とした柴の上に腰を下して、空の星をさびしげに眺めていた。

すると何処ともなく天外てんがいになつかしい声が聞えて、さわさわと木の葉が揺れるかと思うと、日頃恋い慕っていた姉が、繁みの裡なかから出てきたのである。

「姉さん！」

と、余りの嬉しさに一声叫んで飛び付いた。……しかし死んだ人がどうして来たろうと思うと空怖ろしいような、物凄い気持がしたけれど、見れば見る程まさしく自分の姉であり、而して今自分の心細く思っている矢先であつたから、そんなことを考える間ひまがなかつた。

「姉さん、姉さん！ 僕は嬉しかった。」

姉は物も言わんで、微笑ほほえんで、彼のうるんだ愛なさけの籠ひとみる眸ひとみで、二郎を打眺うちながめている。二郎は姉の袂たもとにしかと縫すがり付いたまま、もうもう決して決して、放さないと決心したのである。

「さあ、二郎ちゃん行こう。妾わたしが道を案内して上あげるから、いつかは、日常いっつも妾わたしの帰りが遅いと迎いに来てお呉くれだったのね、今日は妾みちが途みちを教おしえて上げよう。」

二郎はその言葉を聞き、何となく悲しく感じて、姉に手を引ひかて林の裡から出た。……

二郎は心のうちで、どうして姉が斯こん様な山道を悉くわしく知しつていよ  
うか……斯こん様なに暗いのにどうして斯こん様なに路みちが分るだろうかと

訝<sup>いぶ</sup>かしがりながら歩<sup>あ</sup>るいていた。しかし姉はいつになく、沈んで  
いるように見えたので、自分も口を喊<sup>つぐ</sup>んで成<sup>なる</sup>たけ話をせまいもの  
と黙<sup>も</sup>つて歩<sup>あ</sup>るいていたのである……。やがて大きな沢や、幾つか  
の溪<sup>たに</sup>を越えて、細い細い山途に差しかかると、山の端<sup>は</sup>を離れて月  
の光りが溪川の水に宿<sup>やど</sup>っている。二人は黙<sup>も</sup>つたまんまで途を歩い  
ている……

この時姉は始めて弟<sup>おとと</sup>を顧<sup>か</sup>みて、さも名残惜そうにして見つめた  
のである。弟も月の光りに始めて青白い姉の顔をつくづく眺<sup>なが</sup>め  
た。

「この道を真直<sup>まじ</sup>に行く<sup>い</sup>くと、直<sup>じ</sup>きに彼<sup>あ</sup>の大きな原に出る、すると向  
うに家が見える。泣<sup>な</sup>かんで早くお帰<sup>かえ</sup>り！ ちようど月も出たか

ら……妾は此処ここで見送っていますよ。」

二郎の声はもう涙に咽むせんで、

「じゃ姉さんは、やっぱり帰らないの……。僕は姉さんと一しよに行きたいから連れて行って頂戴！僕は独りで帰るのは厭だ。」

姉は流石さすがに躊躇ためらっていたように見えた。さも哀しげに溪間たにまの月

影を見下して、果ては二人してさめざめと泣くのである。小さき弟の胸には張り裂けんばかりに悲かなみの充ちて、さも心配らしい姉の顔を眺めている。

「そんなら、また明日彼の池の畔へ来ておくれ！きっと妾が待っていますから、而して楽しく話をしましょうね。」

「じゃ姉さんは明日も、来てくれるなら僕はきつと彼の池の畔へ行つて待つていよう。」

「ああ、ほんとうに妾が待つてよ。」

「うんにや、僕の方が先に行つて待つているんだ。」

「ほほほ可笑おかしいことね。」

と、さびしげに姉は打笑うちえんだ。

「また明日にしてよ、今日はこれでお帰りよ。」

二郎は首うなずい肯たまま、泣く泣く坂を下りて行つてしまふ。姉は

爪先だてて見送つてゐる。二人は幾度も幾度も見返えりつ、見送りつ、月の光にほんのりと姿は霞むが如く見えぬまでも……

しかし二郎の両親ふたおやはいつになく我が子の遅く帰つたのに心配

して、種々いろいろと二郎に仔細を問うた。始めのうちこそは何とも言わなかつたけれど、問い詰められて隠しきれず、つい一部始終を物語つたのである。而してどうか姉を家へ連れて来たいと両親にねだる請願と両親は驚いて、顔の色を変えて、

「二郎や、それは魔物がお前を見込んでいるのだ。もうもう決してその池の畔はたへ行くことはならんぞ。」  
と、堅く言い聞かせた。

その翌日のこと、二郎はいつもの山へ出掛けはしたが、偶然ふと昨日、両親から言われたことを思い出して、池の畔りへは行かなかつたのである。

やがてその日の昼頃となつて、もう大分仕事に疲れてきて、休

もうかと思つていると、遠くで自分の名を呼ぶ声が聞こえる。二郎は握つていた青々とした小枝を地上ちびたに落して、耳を傾けていると又呼ぶ声が聞こえるのである。確かに姉の声に相違ちがひがない。

二郎は空怖しくなつて、林の中に慄すくんでいると、その声は漸々と近づく。……突如として自分の前に立ち塞ふさがったものは、顔色の青晒あおぎめている女の姿！ ぎよつとして見上げると頭髪かみのけは顔に乱れていて、物も言いわんで、自分を捕えたまま冷ひやかにけらけらと笑い、またさも嬉しそうに、我が顔を覗き込んだ。

「行こう行こう、二郎ちゃん！ 妾さつきは先刻から大分待つていてよ。」

と無理にその場を押し立てて、何処いずくともなく連れ去つてしまった。

……二郎は何処どこへ行つたであろう、その晩はどうとう帰つて来なかつた。両親は非常に心配して、今日山へやらなければよかつたと後悔をしていると、日暮方から鳴出した雷なりだは益々ますますすさまじくなつて、一いつてん天墨を流したようで、篠突しのつく大雨、ぴかりぴかりいなすまと電が目の眩くらむばかり障子に映うつつて、その毎たびに天地も覆くつがえるように雷いかずちが鳴り渡る、その夜は両親は心配に泣き明した。明くる朝を待つて池の畔へ行つて見ると、可哀そうに二郎の被つていた菅笠すげがさが池の水に漂うていた。父親は其処そこに泣き倒れた。而して一先ひとまず村へ帰つて人々の助けを借りて、再び池の中を搜索したけれど、その苦心の効かいもなく、とうとう死骸を見付ることが出来なかつた。



其処で村の人達は相あい会かいして、これには何か不思議な仔細がある  
 るのであろうと議ぎ結けつをして小祠やしろを大きな合歡ごんりつの木の下に建こん立りつし  
 て、どうかこの村に何事たたりの祟たたりもないように、どうか早かん魃ぼつの時に  
 はこの村の田畑に水の枯れぬように、どうか小供の水難を救われ  
 るようにと祈き禱とうをして、さてこの池をば稚ち子ごが淵ふちの明み神ようじんと名  
 づけたのである。

毎年初夏の頃になると、薄うすくくれない紅く色の合歡の花が咲く。その頃  
 になるとこの祠やしろの祭があるので、村祭同様に村中の者が家業を休  
 む。その時にはこのさびしい山中にも太鼓の音がひびき、笛の音  
 も冴える、而して春、夏、秋、冬、この池の水は青々として黒ず

んで、静かな山や、林や、杜もりの影を映している。青葉の夏も、紅葉の秋も、いつもなつかしい慕わしい眺めである。

# 青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」ちくま文庫、筑  
摩書房

2008（平成20）年8月10日第1刷発行

2010（平成22）年5月25日第2刷発行

底本の親本：「愁人」隆文館

1907（明治40）年6月25日発行

初出：「早稲田學報」

1906（明治39）年3月号

※「歩るいて」と「歩いて」の混在は、底本通りです。

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 稚子ケ淵

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>